

令和7年度 学校経営構想

1 構想に向けた押さえ

(1) 基本的な考え（大切にしたいこと）

社会の多様性や急速な情報化、技術革新によって生活が質的に大きく変化している現在において、将来を予測することは困難である。そんな現在と予測できない未来に対応していく子供たちには、主体的に考え自己の未来を切り拓いていく力が必要となってくる。変化や課題を受け身的に対処するのではなく、自己肯定感を持って自らを理解し、主体的に可能性を最大限に発揮しながら、よりよい人生を自ら切り拓いていくことが重要になってくる。そのため、自立した人間として、目標と意欲を持ち、知識と情報から自ら判断し、主体的に課題解決を目指し、他者と協働しながら、さらに新たな価値を生み出していく力が求められる。

社会の加速度的な変化の中でも、新しい時代を生きる子供たちが、人生を切り拓き、生涯を生き抜く力を培い、持続可能な社会の創り手となっていくためには、学校教育において、学習問題を効率的に解ける力を育むだけでは十分ではない。学校は、これまでと同様に「人」として大切にしなければならぬものや、「教育」の根底にある不変なものを大切にしながらも、新しい時代に求められる資質・能力を育成していかなければならない。

すべての子供たちが「学校が楽しい」と感じながら自らの可能性を伸ばし、職員が生き生きとやりがいを感じながら働き、家庭や地域から信頼される学校を目指して、人権教育を基盤としながら、以下の3点を大切にしていきたい。

「人権教育を基盤とした個の承認」

ここで言う「承認」とは、“相手の存在や変化に気づいていることを伝える”ことである。人には皆、「だれかに認められたい」という承認欲求があり、自分のことを認めてくれる人や自分の気持ちに共感して大切な存在として扱ってくれる人がいることで、自己肯定感が育ち、自己実現の欲求へとつながっていく。「承認」の中でも、「子供の存在そのもの」に愛情を持って肯定的に認める「存在承認」を大切にしたい。「存在承認」をベースに教育活動を展開し、子供一人一人のよさや個性を大切に、子供が自分らしさを発揮しながら成長できるよう育てていく。その基盤となるものが、全ての学校教育活動を通じて行われるべく「人権教育」である。

「真の子供理解」

真に子供理解するとき「子供の言動は氷山の一角である」ことを前提にすることが大切である。目の前の子供の言動は氷山の海面上の部分であり、目に見え、聞こえる言動の背景、つまり海面下の氷山の部分に言動の誘因や動機、心理がある。このような海面下の部分を探ることが、真の子供理解である。そのために、子供の言動を偏見のない目と心で観察し、真摯に耳を傾けて子供の言葉と心を聴き、真心をこめて子供と話すことが大切である。子供の心に深く共感しながら、冷静な視点で客観的に子供理解に努め、子供自身が力を蓄え、自分を成長させられるようにする。

「心理的安全性と個の強さ」

所属しているチームがよい状態にあつてこそ、一人一人の個人が輝くことができる。教育に携わる個人として向上し、主体的に力を発揮するためには、「チーム宮園」が組織として安定していることが大切である。また、プロである職員が、仲間を信じて個々の役割や責任を確実に果たすことで、チームの組織力も向上していく。そのため、互いをリスペクトしながら自由に思いを表現できる心理的安全性の高い職員集団を目指し、個の向上と組織の向上を図っていききたい。同時に、心理的安全性の高い認め合える学級集団をつくり、楽しい学校、信頼できる学校づくりにつなげる。

(2) 令和6年度の子供の様子（「宮園小の今と未来を考える」から）

ア よさ・伸びた点

- ・あいさつ・会釈（元気がよい、校外でも）・優しい・親しみやすい
- ・困っている子を見付けると優しく声を掛ける・学年が違って仲が良い
- ・男女の仲も良い・友達のよさを見付けることができる
- ・素直で決められたことや自分の役割を責任持って果たそうとできる
- ・問いを解決したり、学びを振り返ったりして主体的に学ぶ姿勢が育ちつつある
- ・行事に対して前向き・読書に親しむ子が増えた・給食をもりもり食べる

イ 課題

- ・苦手なことに挑戦したり、自ら高い目標を設定して行動したりできない
- ・気持ちのコントロールが苦手な子が多い
- ・相手の気持ちを考えた言葉遣いができない
- ・規範意識が薄い（特に集団として、流されやすい）
- ・自分で判断する姿勢が少ない（自信がない）

ウ 付けたい力

- ・主体的に取り組む力（自分から考えて行動する）
- ・自己肯定感・自己調整力・レジリエンス・失敗を恐れず挑戦しようとする力
- ・集団としての規範意識の向上 ・読む力、聞く力、表現する力

2 校訓

「よく考え 心ゆたかに たくましく」

校訓「よく考え 心ゆたかに たくましく」は、平成17年度に制定された。

「考える」「心ゆたか」「たくましい」は、宮園小学校誕生以降、学校教育目標や重点目標として、多くの年度で記載が見られる。これは、いかに社会が変化しようとも、不変の子供像として、実現を目指していかなければならないことであり、急速に変化し、予測が困難な社会を生きる子供たちを育てていくこれからの学校教育に求められていることである。私たちは、この校訓を軸として、未来を切り拓く子供たちを真に大切にする学校を創っていくように努めなければならない。

3 学校教育目標

「笑顔の花を咲かせよう」

学校教育目標「笑顔の花を咲かせよう」は、校訓「よく考え 心ゆたかに たくましく」が示す子供像の具現に向け、令和元年度に設定され、**それ以来**、子供たちや職員に目指すべきキーワードとして深く浸透している。

これまでの実践による子供たちの良さとして、優しさ、素直さ、真面目さが挙げられる。少しずつ自ら行動しようとする姿も見られてきた。また、友達の良さや違いを認め、協力的な態度で仲間とともに活動したり、話し合ったりする姿が多く見られる。

しかし、**自分に自信がないため、苦手なことに挑戦したり、自ら高い目標を設定して行動したりできない面もある。また、よりよい学校生活を送れるように自ら考え行動したり、よりよいものを創り出そうとしたりする意欲に欠け、受動的であるという課題が挙げられる。**困難を乗り越えるたくましさ、しなやかさは、依然として弱いという実態がある。

子供一人一人が、思考や挑戦、様々な活動の取組をする過程で、丁寧な価値づけをすることを通して、充実感や満足感、成長等を実感し、次の主体的な意欲につながる自己肯定感を実感しながら、真に笑顔の花を咲かせられるよう、さらに実践を重ねたい。また、子供の成長に携わる職員が常に笑顔で教育活動を推進することが重要であり、子供や学校を支えてくださる保護者・地域も笑顔になることが大切である。

そこで本年度も、様々な場面で「笑顔の花を咲かせよう」の具体の姿を実際の子供の行動に表れるようにすべく、全教職員の共通理解を図り、教育活動を進めたい。

4 重点目標（目指す子供像）

「考え、踏み出す子」「心も体もたくましい子」

学校教育目標具現のため、目指す具体的な子供像を令和7年度は「考え、踏み出す子」「心も体もたくましい子」と設定する。

子供たちの実態から見て、友達のよさを見付けたり、協働して活動したりすることはできている。全ての学校教育活動において「人権教育」への意識化を図り、子供一人ひとりの自己肯定感を安定して高め、自信を持って主体的な取組へつなげていくとともに、互いを尊重し合いながら協力して高め合っていく仲間づくりの取組をベースとして、本年度は、「考え、踏み出す子」「心も体もたくましい子」の2点突破で教育活動を進めていきたい。

子供の実態や学校評価結果から、目標ややるべきことが明確に示されたり指示されたりすると、真面目に一生懸命取り組むことができるという良さと共に、主体的に取り組もうとする姿も見られてきた。しかし、今の時代に生き、これから自己の未来を切り拓いていく子供たちの姿として、さらに主体的に考え、自ら力強く一步を踏み出し成長する姿を目指したい。

本校の子供の実態や子供たちが生きる現在と未来の社会を考えたとき、自ら考えて主体的に表現したり、課題解決に向けた新たな考えを生み出して行動したりする力、苦手なことにも挑戦し、困難を乗り越える力（しなやかな強さ）を育成することが必要であり、子供たちのよさをさらに伸ばすことにもつながると考える。

子供の姿として以下のように押さえる。

「考え、踏み出す子」 主体的に考え、判断し、一步踏み出し成長する子

「心も体もたくましい子」 主体的に取り組み、粘り強さとしなやかな強さのある子

この重点目標は、子供たちと共有し、目指す姿に向けて、どんなことに取り組むか具体的な目標設定をする。子供の育ちを後押しし、一人一人が力強く伸び伸びと取り組み、自信を付けられるよう指導と支援を継続的に行う。

5 学校経営目標

「だれもが大切にされ笑顔で夢を育む学校」

学校はだれもが一人一人の人間として大切にされ、笑顔のあふれる場であってほしい。そして、未来の担い手である子供が「夢」のある未来を築いていく人材に育てたい。

子供が愛情を持って認められながら、「なりたい自分」を自分の努力によって実現し、教員が指導の成果を「子供の姿」で実感し、職員が「働くやりがい」を、教員や子供、保護者との関係性の中で感じ、保護者が子供の将来に向けて期待感をもち、地域が子供の様子に一喜一憂しながら、地域とともにあることを感じる。そして、子供も職員も保護者も地域も「笑顔の花が咲く学校」でありたい。

真の子供理解のもと、安心して可能性を伸ばし、力を発揮できる場と授業を大切にする。自分で考え、自ら踏み出し行動する中で自己肯定感を味わい、仲間と高まり合い、粘り強く取り組むしなやかなたくましさをもつ子供を育てたい。

【経営の重点】

- (1) 子供や職員の「個」が尊重され、だれもが安心して可能性を伸ばし、力が発揮できる学校をつくる。
- (2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、確かな学力の向上を図る。
- (3) 主体的に粘り強く取り組むたくましさや、ともに高まり合う態度を育てる。
- (4) 家庭や地域の人・もの・ことと連携し、地域とともにある学校づくりを推進する。
- (5) 教育への情熱・専門性・人間性の向上に努め、職員一人一人の特性を生かした組織的で活力ある学校づくりを推進する。

【学校経営目標具現に向けた具体的な取組】

- (1) だれもが安心して可能性を伸ばし、力が発揮できる学校をつくる。

【安全・安心な学校】

- ① 子供の命を守ることを第一に考え、子供が安心して安全に生活できる学校環境をつくる。学校危機管理マニュアルの共通理解を図り、緊急時に迅速な判断・対応

ができる体制作りに努める。また、子供自身に自らの命を守る力を身に付ける。

- ② 「存在承認」の考え方を基盤とした人権教育を意識し、だれもが一人の人間として大切にされている環境づくりに努め、自己肯定感を育て、自己実現の欲求へとつなげる。安心できる居場所づくりに努める。
- ③ 相手を大切に認め合う明るい挨拶を交わし、挨拶を学校自慢にする。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、確かな学力の向上を図る。

【確かな学力の向上】

- ① 校内研修を核とし、教師自身が主体的に学び、子供とともにつくる授業力の向上に努める。特別支援教育の考え方によるユニバーサルデザインの視点を取り入れ、「自ら学ぶ子」の育成を目指した授業づくりを図り、授業で味わう自己肯定感や自己有用感を生徒指導にもつなげる。
- ② 真の子供理解に努め、個に応じた指導・支援を充実し、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る。
- ③ 子供主体の問題解決的な学習を通して、「学び」や「学び合い」を実感させ、思考力・判断力・表現力等の育成に努める。また、確かな読解力を育成しながら、対話力（話す力・聴く力）の向上により、自己の考えを深める。
- ④ ICTを活用した授業についての研修を進めるとともに、積極的・効果的な活用を図る。
- ⑤ 家庭学習の習慣化に努めるとともに、「宮園小学校型」の主体的な家庭学習の推進を図る。

(3) 主体的に粘り強く取り組むたくましさや、ともに高まり合う態度を育てる。

【主体性と社会性】

- ① 子供が進んで活動したり、挑戦したりできる場を設けるとともに、その過程において積極的に価値付けをし、次の一步につながるよう意欲を高める。
- ② 特別支援教育の視点に立ち、子供一人一人を大切にし、その子供の状況を正しく捉え、積極的な生徒指導や心に寄り添った言葉掛けに努める。
- ③ より良い人間関係づくりからなる学級力を高め、個や集団が育つ学級経営に努め、互いに高め合う仲間づくり・絆づくりを推進する。
- ④ 道徳科や特別活動、総合的な学習を中心に、意欲と実践力を高める指導に努める。

(4) 家庭や地域の人・もの・ことと連携し、地域とともにある学校づくりを推進する。

【地域とともにある学校】

- ① 学校だよりやHP、学年だより、面談、懇談会を活用したり、家庭との連絡を密にしたりすることで、子供の良さを共有し、保護者・地域から信頼される学校づくりを推進する。
- ② 地域や外部の教育力を積極的に活用したり、学校運営協議会と連携したりすることで教育活動に広がりや深まりをもたせる。地域の自然や文化・歴史、良さを生かした教育を推進する。
- ③ 旭が丘中学校区一貫研修を進める中で、中学校・幼稚園と連携して教育活動を進

める。特に、幼小中一貫教育のスタートである幼稚園教育と、ゴールである中学校教育を意識した小学校教育の在り方について考えながら実践に努める。

(5) 職員一人一人の特性を生かし、組織的で活力ある学校づくりを推進する。

【活力ある学校づくり】

- ① R P D C Aサイクルが機能する体制をつくり、子供と向き合う時間の確保のため、教育課程の見直しを随時行う。
- ② 職員間の「報連相」を徹底し情報を共有する。また、自分の思いや考えを自由に発言できる心理的安全性の高い職場づくりに努める。
- ③ 互いに「その人らしさ」を認め合い、力を発揮しながら、学び合い、高まり合うことのできる職員集団をつくる。
- ④ 職員一人一人が、目指す学校や児童の姿に向けて主体的に参画意識をもち、アイデアや改善案を積極的に出し合い、共有する。
- ⑤ 組織としてタイムマネジメントを推進し、働き方改革に努める。

6 勤務環境改善

- 子供と向き合う時間を確保するために、子供にとって「価値のあるもの」「必要なもの」は何か、教職員が知恵を出し合って教育活動を見直す。
- 教職員一人一人が、積極的にタイムマネジメントを行い、組織的にも勤務時間を意識した働き方を推進する。
- 互いをリスペクトし、心理的安全性の中で、笑顔のあふれる職場環境をつくる。
- 風通しのよい職場環境づくりのために、職員間で対話の場面を意図的に設定する。
- S S W、S C、スクールサポートスタッフ、地域の教育力の積極的な活用を図る。